

中村春作著

『徂徠学の思想圈』

(ぺりかん社・二〇一九年)

澤井 啓一

本書は中村春作氏が若い頃から現在に至るまでの間に書きためてきた获生徂徠に関する論文をまとめたものである。おおよそであるが、前半に一九八〇年代の比較的若い時期に書かれた論文が並べられ、後半は二〇一〇年前後の論文が収録されるという構成となっており、前半と後半では議論の方向性が異なっているように思われる。ただし、初出の論文をそのまま並べたのではなく、現在の視点からの加筆訂正を加えながら一つの著作として読めるような工夫がされているので、バラバラな論文を集めたという印象はなく、むしろ『徂徠学の思想圈』という本書のタイトル通りに徂徠学の多面性を論じた著書として読むことができる。

中村氏の徂徠論の大きな特徴は、徂徠という人物が持つ思想的な可能性をさまざまな角度から取りだそうと試みたところにある。それは、とりわけ早い時期の論文に顕著であるが、近世から近代に向かう思想動向のなかに徂徠を位置づけることでもなく、徳川日本という時代状況と徂徠を関係づけることでもな

かった。もちろん本書の後半に収められた論文では、徂徠を東アジアにおける儒学の動向と関連づけようとする試みや太宰春台や懷徳堂を取りあげて徂徠が登場したことの影響を探る試みも見られるが、それは中村氏の当初からの意図というよりも、その後の日本思想史研究の変化に対応したものだっただけと思われる。

このように述べる、中村氏が研究動向に振り回されていたかのように聞こえるかもしれないが、そうではなく、研究がどのような方向に推移してゆくかを見極めながら自分なりの立ち位置を確保しようとした結果なのである。それは私を含めた中村氏とはほぼ同世代の研究者に共通する特徴と言えるかもしれない。そして、その大きなきっかけは、中村氏が「あとがき」で触れている「徂徠シンポジウム」(一九八四年)にあったことは間違いない。このシンポジウムは、丸山眞男を始めとする多くの研究者の活躍によって戦後日本の思想史研究がさまざまな領域で大きく発展しながらも、まだその成果が倫理学・歴史学・政治学などといった既成の個別研究領域のなかに閉止されていたことを問題視し、研究領域を超えて問題意識や方法論を共有化しようとする若手の研究者たちによる最初の試みであった。

六〇年代・七〇年代に飛躍的に発展した近世日本思想の研究がはたして「タコツボ」化されていたかどうかについては異論もあるだろうが、すくなくとも当時の若手研究者の「主体」的な意識としては、それぞれの研究領域の内部で討議されていた

ことが、その領域の研究者だけのジャーゴンと化してしまい、外部に向けて開かれていなかったことへの不満があったことは確かである。そうした閉止域を開き、問題意識ばかりでなく研究方法を含めて相互に交流する必要性を若手の研究者は感じていたのである。領域を異にする研究者が一つの題材とともに討議することを目的に集まったのが「徂徠シンポジウム」なのであった。

徂徠研究に限って見れば、それを契機に従来の政治思想史や倫理学の観点からだけではなく、欧米の方法論などの影響を受けた哲学・文学・歴史学の問題認識を取り入れた多彩で多様な研究をもたらすきっかけとなったと言えるだろう。もともと私自身は「徂徠シンポジウム」にも、その後の「仁斎シンポジウム」(一九八五年)にも参加しておらず、一番最後の「懷徳堂シンポジウム」(一九八七年)でかろうじて発表する機会を得た程度であったから、そうした熱気をどこまで共有できていたかは分らないが、中村氏が「あとがき」で書いていることに関しては周縁にいた私でもその通りだとおおいに共感した。

じつは本書最後の第九章「風俗」論への視角」は「懷徳堂シンポジウム」で中村氏が発表したものが元になっている。この論文は、これまで文学や文化史で使用されてきた「風俗」という概念を仁斎や徂徠、さらには後期水戸学などに適用して、近世日本思想史の動向として捉えようとした意欲作であり、さきに述べた「徂徠シンポジウム」をきっかけとした新しい研究

動向の重要な成果の一つでもあった。この論文では、仁斎の「俗」や徂徠の「風俗」に関する言説を朱子学の本体論的世界把握を批判するための議論としたうえで、それを起点として幕末・明治初期の「国家」論や「国民」論にまで展開する「思想史」が提示されていた。

この構想自体は第二章におかれた「名」と「物」と「俗」と——初出の論文名は「徂徠学の基層——「名」と「物」の世界における「俗」の形成」(一九八四年)——で示されていたが、そこでは「辨名」などにおける「名」と「物」に関する議論に力点が置かれ、「俗」については徂徠の思想を分析するうえで有効であると指摘されていただけであった。第九章の論文は「俗」という概念を中心とする構成へと発展させ、「俗」あるいは「風俗」への言及が徂徠だけにとどまるのではなく、徳川中期以降の儒学・国学などにも認められ、それゆえに徳川後期の動向に通底する重要なキーワードであったことを指摘する。この点において第九章の論文は、発表当時だけでなく今に至るまでも、徂徠論として、また徳川日本思想史の研究として異彩を放っている。

もつともこの論文が本書の最後に収録されていることは、さわめて示唆に富むこの構想がその後の中村氏の研究において十分に活かしきれなかったことを示しているように思われる。たしかに第五章として収録されているが、実際にはかなり後の時期に書かれた「政談」の世界——初出の論文名は「荻生徂

体『政談』の世界」(二〇一三年)——で、岸本美緒氏の研究を引用しながら、明末清初、とくに顧炎武などの「風俗」論が「新たな「共同体」への問いかけ」であり、そこに徂徠の政治論との「暗合」が認められるという指摘がなされている。それゆえ中村氏が「風俗」という概念を使用した分析を日本だけでなく東アジア全体の思想動向についても探究しようとする問題意識をもっていたことは確認できる。

ただ論者からすると、「風俗」ないし「俗」への関心は、日本や明清中国だけでなく朝鮮後期の思想にも認められ、東アジア全般にわたる大きな動向であったと思われる。十六世紀あたりから儒学が士大夫などのエリート階層から下位層へと広がることを契機にさまざまな分野で「大衆化」——私は「土着化」と呼ぶ——が起こる。「俗」への志向性はこうした現象を捉えるための重要な方法的視座になるだろう。中村氏の構想は東アジアの動向に連動しながら、そのなかで独自性を強めていった日本儒学、あるいはそれに刺激されて登場してきた国学を理解するための重要な着想であった。しかし、八〇年代から九〇年代にかけての日本思想史研究においてはいささか早すぎた問題提起だったかもしれない。日本思想史研究のなかで東アジアとの関係性に関心が高まるにはもう少し時間が必要だったからである。

第四章「経書注釈と思想史の視点」および第八章「反徂徠学、懷徳堂の儒学」の元になった論文は、「寧^{にん}プロ」と通称された

「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成——寧波を焦点とする学術創生」という科研費・特定領域研究における成果である。小島毅氏を始めとした中国や日本、朝鮮・韓国、モンゴルなどを対象とした研究、しかも思想史ばかりでなく歴史学や文学・言語学などさまざまな学問領域で活動している人々が集められ、それぞれの知見の共有を目指したのが「寧プロ」であった。古代から近代に至るまでの東アジアの文化交流を対象とすることによって研究者自らも学際交流を図るという、ある意味欲張った共同研究であった。もっとも私はこの企画に関しても依頼されて寄稿したことはあるにしても正規のメンバーではなかったもので、どのような学際交流が行われたかまではよく分かっていない。ただ当時高まっていた東アジアとの関連性のなかで日本思想を考えるという気運を的確に反映した企画だったと言うしかない。中村氏はこの企画のなかで、自ら「訓読」という問題関心に基づいた共同研究を主宰し、その成果はすでにいくつかの出版物として結実している。これらの業績についてはここでは触れないが、中村氏が東アジアとの関係性を重視して日本思想史研究を推進した旗振り役の一人であったことを強調しておきたい。

第四章・第八章の元の論文は、同じく「寧プロ」の「儒学テキストを通しての近世的思考様式の形成——日中における対照的研究」班の成果である『東アジア海域叢書5 江戸儒学の中庸注釈』(汲古書院、二〇一〇年)に収録されていた。これにつ

いては本誌（第四十四号、二〇二二年）で高山大毅氏が書評されているのでご存じの方も多いことだろう。ただこの報告書ではほかの儒学者と横並びの形で徂徠と懷徳堂の特徴を述べるものであったが、本書では両者の間に徂徠の別の議論や春台の議論を挟み、その後に懷徳堂の議論が扱われたことから、『中庸』の解釈の特徴だけでなく、それが近世日本の儒学史の展開にどのような意義があったのかがよく分かるようになっていいる。とくに武内義雄の懷徳堂評価を紹介しながら、懷徳堂の「朱子学」は宇宙論を基礎とするもとの「朱子学」とは異なり、徂徠の議論を批判的に継承したことによって「人事」すなわち現実社会の問題へと関心を向けたこと、またこの延長線上に武内を含む近代日本の儒学研究が位置することを指摘した点は傾聴に値しよう。

春台を扱った第七章「氣質の性」の行方は、もともとの発表が一九九二年であることを考えると、春台をたんなる徂徠のエピゴーンとするのではなく独自性をもった思想家として評価する近年の研究の濫觴として見るができる。春台を研究するうえで本章から学ぶことは多い。しかし春台の難しいところは、徂徠学が理解できなかったがゆえに別の議論を展開したのではなく、むしろ本質的には異なることを春台自身が理解しながらもあくまでも徂徠学の徒であると自己規定していたところにあり、それをどのように解釈するかはまだこれから課題だと思われる。こうした春台の思想の解明は、近世日本

における儒学の展開という図式のなかに取り込んで説明するだけでは不十分であり、春台そのものに即して深く理解することが必要である。中村氏に要求することではないが、今後の課題として指摘しておきたい。

第一章「物」に拠る教え」と第三章「古言」から見通す「先王の道」は、すでに紹介した第二章とあわせて、中村徂徠論の中核をなしており、元の論文の「徂徠における「物」について」（一九八一年）、「荻生徂徠の方法」（一九八八年）を通じてよくご存じの人も多いことだろう。これらの論文に共通しているのは、吉川幸次郎の「徂徠学案」（日本思想大系36 荻生徂徠 岩波書店、一九七三年）以降に関心が高まった「古文辞学」を徂徠学を根柢から支える方法的な思考と捉え、「物」や「名」、さらに「古言」といった徂徠が使用した言葉をキーワードとしながら、徂徠学が問にかけている問題を丁寧の説明しようとする姿勢である。本書の帯に「本格的入門書」と書かれているが、まさしく徂徠に関心をもつ人々が徂徠学の基盤とそこから派生する問題圏とを理解するうえでおいに役立つに違いない。

もちろん本書は入門者だけでなく、研究を積み重ねてきた人々にもいろいろと示唆を与えてくれる。とりわけ「再確認しておきたいのは、徂徠が「言語」による説明的解釈を捨てさった後に、ふたたび、「古言」あるいは「古文辞」という、まさにこれもまたもう一つの「言語」によって世界を捉えようとした点である。（略）そしてこの点に儒学者荻生徂徠の本領があ

ったのだと私には思われる」(一〇〇頁)という指摘には、これまで徂徠の著述と格闘してきた多くの研究者が強く首肯するところであろう。徂徠を政治思想家・社会思想家とみなすのではなく、近世東アジアに生きた儒学者の一人として捉えようとする方向性が切り開かれているからである。「徂徠シンポジウム」以降の徂徠研究における到達点の一つが示されたと考えてよいだろう。もちろん本書が徂徠学がもつ複雑な構造——といっても、詩文から政治改革に至るまでの近世東アジアの儒学がもつ普遍的な構造——を完全に解き明かしているわけではないが、研究をさらに進めるための端緒となっていることは確かである。

第六章「華夷変態」のなかの徂徠学」は徂徠論としては異色の論文である。琉球王朝や音楽などに関心をもつ一部の好事家にしか注目されてこなかった『琉球聘使記』という作品を「華夷変態」、すなわち明清の交替という東アジア全体に大きな影響をもたらした事態のなかに位置づけて論じているからである。現在石垣島に居を構えて沖縄の思想・文化を深く理解しようとしている中村氏が琉球時代の儒学や文化について論じるのは不思議ではないが、そうした中村氏の問題意識の高まりに徂徠が役買っていたことは興味深い。

この論文では、『琉球聘使記』のなかで徂徠が引用した「古歌」を題材に、これまでどのような言説が展開されたのかを紹介しているが、それは近世から近代にかけての琉球(沖縄)認

識の変遷をたどる内容ともなっている。この話題を縦軸として、白石や徂徠などの琉球への関心を紹介しながら、それが「華夷変態」という現実世界の大きな変化と「失われた古代」の再発見という問題関心とが交錯するなかで展開していることを指摘し、白石の「言語」や徂徠の「楽」に関する議論はその証左だと論じている。東アジアの大きな潮流のなかで近世日本の儒学を論じるというスケールの大きな議論だと言えるが、そうであれば、琉球だけでなく朝鮮に関する認識も同時に扱えばより説得力のある議論になったと思われる。白石に関しては朝鮮使節の問題に触れているが、徂徠および徂徠門下にとっても朝鮮使節との関係は重要であった。詩文制作という文学の領域に関わることでなので扱いづらかったのかもしれないが、せっかく徂徠と「琉球古歌」との関係を取りあげたのだから、残念に思われる。

以上に述べてきたことは中村氏の意に染まないものであるかもしれない。過去に書いた論文に現時点での知見を交えて修正を加えるという作業は、現在の研究水準から評価して欲しいという意図を反映しているからである。そうした中村氏の思いは十分に承知しているが、ほぼ同じ時代をともに歩んだ者の一人として、過去をふり返るというノスタルジックな感傷を綴ることになるにしても、現在までの徂徠研究の推移とそこにおける中村氏が果たした役割とについて述べないわけにはいかなかった。この点について中村氏および読者諸氏にお詫びしたい。

(恵泉女学園大学名誉教授)